

# 東彼杵 ダラフ

7 / 23 郷 川内郷

虚空蔵山のふもとに広がる川内郷へ。  
彼岸まつりに参加して、ひとりの山守に出会った。  
信仰の山のすばらしさを教えていただき、  
昭和初期の鉄山跡までも一緒に探検してくれた。

制作 地域おこし協力隊  
文 飯塚将次  
写真 堀越一孝  
編集・デザイン 小玉大介



山守と地区の世話人が持つ松明が燃やされ、虚空蔵山の参拝登山が始まる





多くの人に慕われる山口政治さん。  
「山守は人のためだからできる」と  
きっぱり

東彼杵町と川棚町、嬉野市にまたがってそびえる虚空蔵山。弘法大師が修行を積んだと伝わり、古くから人々の信仰の対象として崇められてきた。山頂の祠には、虚空蔵菩薩が祀られている。

9月23日早朝。まだ真っ暗の中、川内登山口に人が集まってくる。この日は毎年行われる「虚空蔵山彼岸まつり」。夜が明けぬうちから登山を開始し、山頂で日の出を拝む。祠の前では神事も執り行われ、地域の人たちが参拝客をもてなすという。

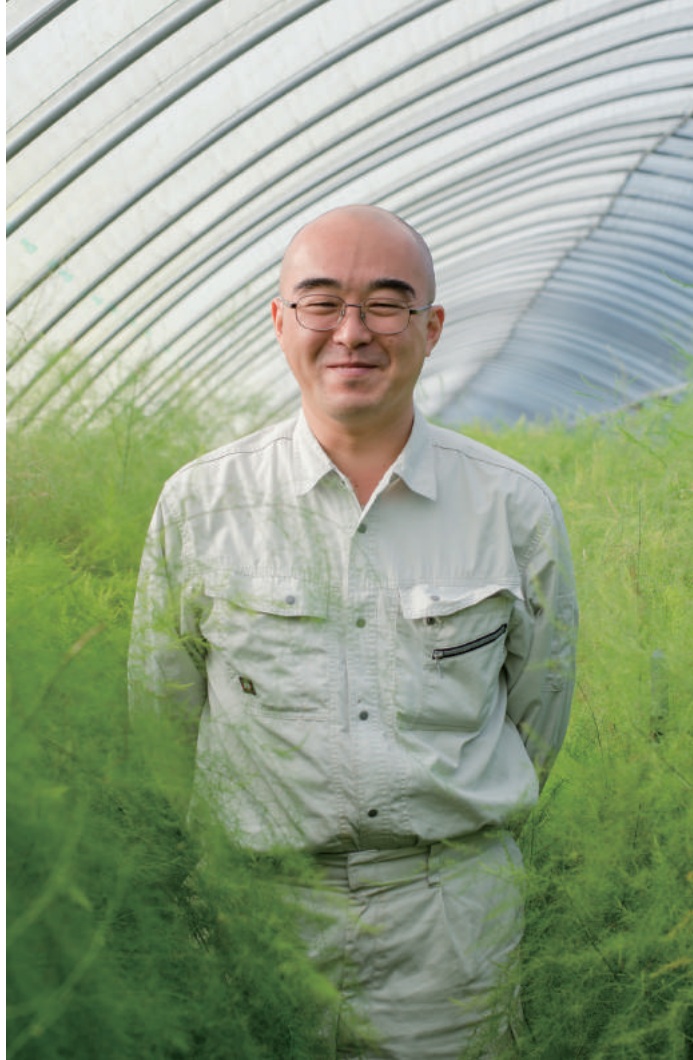
やって来る人ひとりひとりに声をかけ、せわしく動く男性がいる。虚空蔵山の山守をつとめる山口政治さんだった。まつりの準備を取り仕切りピリピリした感じに思えたが、私たちを見つけると、「よう来てくれた」と相好を崩した。

虚空蔵山の山守は代々、川内郷に住む男性がつとめてきた。山口さんも20年ほど前に地区の人に頼まれて以来、77歳の今も現役でその役目を果たしている。報酬をもらえないわけではないが、新しい水とシバを持って毎月数回、山頂まで登る。祠の水を替えて清掃をし、お参りするのがつとめだ。そして、毎年9月23日に行う「虚空蔵山彼岸まつり」が一番大事なつとめ。地区内外から多くの参拝客を迎えるだけに、まつりを滞りなく終え、山のすばらしさを持って帰って欲しいという思いがあるから力を尽くす。「数日前から山を行ったり来たり。あんまり寝ていないんじゃない」という声もあり、頭が下がる。「今年を最後にして、もうやらんぞ」が山口さんの口癖だが、子どもの頃から登ってきた山だけに愛着は人



見る所で山容が変わる虚空蔵山。川棚町はマッターホルンだが東彼杵町からはテーブルマウンテンのよう





↑ 大阪から子どもの頃に慣れ親しんだ町へ就農するために移住した松井克美さん

一倍ある。地区の人が山守の相談に来た時、一度は断った。しかし肩を落として帰っていく姿を見て、「地区のためやけん、おいがすっけん」と引き受けた。その時から山守として生きることを決めた。

山口さんは「子はおるのか？」も口癖のよう。既婚の若者を見つけると聞いているのは、「こくぞうさんにお参りすると、不思議と子が授かるから」。実際に子どもを授かった人たちにお礼を言われることはたびたび。そういう時に山守をやっていてよかったと実感するそうだ。実は協力隊の小玉隊員もその恩恵を受けたひとりで、12月に待望の第一子が誕生する。今回はそのお礼を兼ねての参拝登山となった。

「行こかー」と予定より少し早い4時半過ぎに山口さんから声がかかる。山口さんと地区の世話役が縦に並んで登り始めた。漆黒の闇を松明の火がぼんやりと浮かび、ヘッドライトのしっかりとした明かりが続く。30人ほどが連なっててっぺんを目指した。地区の人でも彼岸の時以外はあまり登らないようで、この状況を楽しんでいる。史跡“フランの墓”を過ぎると、徐々に休憩する人も出てきた。「ついてこんばイノシシからやられんぞ！」と尻を叩き、笑いが起こる。「松井君は大丈夫かや?」「松井君はアスパラやっているから大丈夫ばい(笑)」

多くの声をかけられていたのは、私たちと同じ移住者で新規就農した松井克美さんだった。大きな荷物を背負って休まずに登っている。「ボクは大丈夫で



↑ 山頂は愛宕神社の境内で彼杵神社が祀る。父と娘の神職による神事は今年が初めて



↑ 彼岸まつりは特別な日。山頂で尾頭付きのサンマを焼き参拝者に振舞われた

す(笑)」

「ついたばい！」と上のほうで声が聞こえる。標高608mの山を30～40分ほどで登ることができた、ということは山道はかなり急だったようだ。暗くて気がつかなかった。

汗だくで熱くなった身体に冷たい風が吹いて気持ちいい。山口さんは神事の準備をしながらも到着する参拝者を労う。「遅かのうー」と場を和ませて、「寒なかね。風邪ひくけんね」と気遣いも忘れない。

6時10分、曇り空の一部分だけが薄っすらと明るくなる。万歳三唱。彼杵神社の神職による神事が執り行われた。御神酒と紅白餅が回ってきて、地区の人たちからおにぎりなどをいただく。山口さんが何か準備を始めた。「ちょっと加勢してー」と女性たちが手招きされる。アルミホイルで巻いて網にのせた。サンマだ！松井さんが運んでいたのは人数分以上のサンマだった。

山頂で秋の味覚が味わえるとは。この粋な計らいは山口さんのポケットマネーから。ありがたくいただいた。雨予報の天気も持ってくれ、サンマをほお張り、美しい稜線と碧い大村湾の絶景も満喫。「もっとたくさんの人にこの景色を見てほしい。お参りにきて」と山口さんは話す。山守の後継者も募集中だが、山口さんの代わりができる人はそういない。山口さんあつての虚空蔵山だから。



以前、飯盛山の鉄山跡を探して断念したことがある。そのことを山口さんに話すと、いとも簡単に案内してくれた。その時はライトがなく中には入らなかったが、日を改めて3人で潜入を試みた。鉄山跡までの道のりは山口さんが切り開いてくれたし、近道も覚えている。

山に入り、苔むした沢を15分ほど登ると洞穴が見えてきた。入り口に着くまでは「ワイナリーとかにできたらいいよね」とか言ってキャピキャピしていた私たち。しかし、いざ中へとなると躊躇してしまう。…怖い。なんか出てきそう。獣もオバケも一緒くたに。

数分の協議の末、好奇心が少しだけ勝った。狭くて暗い中を進むのがこんなに怖いものだとはい。ライトにうごめく不快生物は怖さのレベルでは低く、すぐに慣れた。

5分ほど進むと、穴が二手に分かれている。アニメやRPGのバーチャルでなら見たことがある。水音がする、右の穴へ。滝とまでは言えないが水が落ちるところに出た。ここは穴が上下に分かれていて、水は上の斜めの穴から落ちている。上へ進めなくてもいいが、斜めに這わなければならない。探検隊ではなく協力隊の私たちにはハードルが高すぎる。ファミリーコース!?の方をまっすぐ進むと5分ほどで行き止まりに。もう進まなくていいと思うとホッとすする。ライトを照らすと、頭上は空洞でさっきの斜めの穴とつながっているようだ。最初の二手に分か

れたところまで戻り、左の穴も攻めたが、途中で大きな岩があつて先には進めなかった。頭の中で勝手に描いていた鍾乳洞とかエメラルドグリーンの世界は、当然のことながら何もなかった。

町誌『ふるさと発見』で確認すると、川内鉄山は明治の終わり頃に褐鉄鉱の採掘が始まったが、鉄の含有量が少なく中止となり、大正6年に再び大規模に採掘。その後もいったん廃坑となったが、昭和13年に戦争が激しくなると重要鉱山の指定を受けて再び採掘が始まり、終戦の昭和20年まで続いたと書かれていた。

川内鉄山に詳しい人と話はできていないが、町の大切な産業遺産であることに違いない。こういう埋もれた資源を見つけて掘りおこし、再びスポットライトを当てるのも協力隊の活動のひとつ。洞穴最奥部で拾った価値のわからない褐鉄鉱を見ながら、町の魅力探しはこれからも躊躇せずに進んで行こうと思った。

※川内郷へは、町営バス「川内」「飯盛」のバス停を利用。

次回は一ツ石郷。お楽しみに！

↓ 上下に二手に分かれた洞穴。  
水が流れるアドベンチャーコース!?を断念し真っ直ぐ進む

